

ニマタンパ・シェーラブジンパ

—その事績と著作について—

西 沢 史 仁

序

ニマタンパ・シェーラブジンパ (Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa, 以下、シェーラブジンパ) は、十七世紀に活躍したサンプ寺ニマタン学堂の学僧である。サンプ・ネウートク寺 (gSang phu ne'u thog, 以下、サンプ寺) は、教法後伝期における仏教教学復興の一大拠点となった中央チベットの古刹であるが、後代、サキャ派とゲルク派の多数の講説院 (bshad grwa) を内部に擁するようになった。『黄瑠璃史』(Vaidūrya gser po, 1698年造) には、当時、四つのゲルク派の学堂と七つのサキャ派の学堂とで合計十一の講説院がサンプ寺に存在していたことを伝えており、ニマタン学堂 (Nyi ma thang grwa tshang) はそのうちのゲルク派系の学堂の一つである。

シェーラブジンパは、『黄瑠璃史』所収のニマタン学堂長の系譜では、第28代学堂長ソクポ・シェーラブジンパ (Sog po Shes rab sbyin pa) としてその名を見出すことができる。³ ここから彼がチベット人ではなく、ソクポ、即ち、モンゴ

1 サンプ寺の概要については、小野田 1989, pp. 352-362; 『トゥンカル大辞典』p. 2094など参照。サンプ寺及びその教学に関する筆者自身の研究については後で言及する。

2 『黄瑠璃史』pp. 148.23-149.2参照。

3 『黄瑠璃史』p. 148.18参照。これについては、小川 1990, p. 1に指摘されている。ニマタン学堂長の系譜については、Onoda 1990, p. 1051f. に『黄瑠璃史』及びバンチェン・ソナムタクパの『新旧カダム史』を資料として提示されている。但し、そこに示された系譜は些か問題を含むものである。特に、同論文では、初代ニマタン学堂長に lDan ma blo gros rgya mtsho を立てるが、『黄瑠璃史』を仔細に見るならば、ニマタン学堂長の系譜一覧を示す箇所 (同書 p. 148.10-21) より前の箇所、gNyal rgod rin chen bsam grub によりベセル学堂とニマタン学堂が同時に創設されたと明記されて

ル人であることが判明する。

シェーラプジンパの生涯や事績については、その伝記資料を欠くため、詳しいことは知られていない。但し、デプン寺ゴマン学堂の教科書作成者にしてゲルク派最高の学者の一人に数えられるクンケン・ジャムヤンシェーパ (Kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje, 1648-1721)⁴ の師の一人として、ジャムヤンシェーパの伝記資料に言及されており、若かりし頃のジャムヤンシェーパに大きな影響を与えた人物であることが知られている。

彼の著作に関しては、幸い、中観学、論理学、般若学に関する彼の八つの著作のウメ書体の写本が大谷大学図書館に所蔵されており、そのうちの最初の中観学と論理学の六作品は既に影印版の形で出版されている。但し、これはクン

いるので (同書 p. 147.23-25)、『黄瑠璃史』では、gNyal rgod rin chen bsam grub を初代ニマタン学堂長として立てていると解釈しておく。それ故、Onoda 1990所収の系譜では、シェーラプジンパは第27代に数えられるが、実際には、第28代学堂長に数えるべきである。但し、『新旧カダム史』では、それとは別の人物を初代ニマタン学堂長に立てており、解釈が一致していない。以上の点を含め、ニマタン学堂長の系譜については、西沢 2011、Vol. 1、p. 520f. 参照。

- 4 ジャムヤンシェーパの没年については、1722年とする説と1721年とする説の二つが知られている。『雪域歴代名人辞典』p. 45参照。同辞典によれば、後者は『ドメ仏教史』(mDo smad chos 'byung) に見られる説であるが、『クンケン伝』でも、1721年(鉄丑年)のホル月二月五日としており(同書 p. 233.17)、『トゥンカル大辞典』p. 64や『ゴマン学堂史』p. 83でも同様に1721年としているので、1721年の説を取っておく。
- 5 クンイク (bskungs/bskung yig, 隠字) とは、ドゥイク (bsdus yig, 略字) とも称されるが、བཟོན་ (= བཟོན་བཟོན་) のように、文字を約めて表記する字体を指す。『藏漢大辞典』p. 181参照。「クン (bskungs/ bskung)」という語は、skung という動詞の過去形／未来形であるが、これは、sbed pa (隠す) や gsang ba (秘密にする) という意味であり(同辞典 p. 126)、それ故、クンイクとは、語義的には、「隠字」や「秘密の文字」を意味する。具体的には、そのテキストの内容を秘密するために或る特定の集団内においてのみ使用される特殊な字体である。それ故、クンイクは、その集団の外部の者には理解できないことを意図して案出された文字であるため、非常に多彩なヴァリエーションがあり、同一の文字が各テキストに応じて種々の形に約められる現象が一般的に見られる。クンイクの必要性については、他にも、紙幅を節約するためや、速く筆記するため等の理由も考えられるが、それは二義的なものであって、本来的なものではない。クンイクについては、その起源や成立過程について定かでなく、今後の検討課題として残されている。

イク⁵ (bskungs/bskung yig) と称される特殊な隠字体で筆記されており、そのことはこれまで彼の一連の著作を近付き難いものとしてきた。しかるに、近年、大谷大学真宗総合研究所のホームページから、この六作品を通常のウチェン書体に直した電子テキストが公表されたこと⁶を契機として、これまで殆ど研究がなされてこなかったシェーラブジンパの著作の研究状況が整ってきた。

そこで、本稿では、極めて断片的ではあるが、現在知られているシェーラブジンパの事績及び著作に関する情報を整理し、これをもって今後のシェーラブジンパ研究のための予備的研究としたい。彼の一連の著作のうち、『二諦精解』(bDen gnyis kyi mtha' dpyod) については現在研究に着手しており、その訳註研究の公表を予定しているが、本稿では、紙幅の関係上、それを扱う余裕がないので、『二諦精解』を含む彼の一連の著作の具体的内容については、機会を改めて紹介することにした。

1. シェーラブジンパの事績—ジャムヤンシェーパとの関係を主として—

前述したように、シェーラブジンパの生涯と事績については、伝記資料が伝えられていないため委細は不明である。但し、弟子であるジャムヤンシェーパの伝記資料や『大教義書』(Grub mtha' chen mo) などにシェーラブジンパに言及した記述が見出されるので、ここにその諸情報を集めておこう。

まず、ジャムヤンシェーパは、彼の『大教義書』の末尾において、「四人の師弟 (yab sras bzhi)」の名前を列挙しているが、シェーラブジンパはその中の最後⁸に見出される。その四人とは以下の通りである。

6 筆者の知る限り、シェーラブジンパに関する先行研究としては、大谷大学真宗総合研究所から出版された影印版の付録として付された解題(小川 1990) にごく簡単に紹介されている程度である。

7 <http://web1.otani.ac.jp/cr/twrpw/results/e-texts/sherapjinba/>(2016年9月公開) 参照。この隠字体で記されたテキストを解読してウチェン書体に直して入力する一連の作業はトゥブテンガワ(Thubten Gawa)氏による。同氏の尽力がなければ、この難解な隠字体を解読することは困難であったので、感謝したい。

8 『大教義書』p. 639.3-7: 'Jam mgon bla ma khri rin po che Ngag dbang blo gros rgya mtsho'i sras kyi thu bo (1) theg chen sbyor lam bar gsungs pa'i rgyal sras chen po mdo sngags gnyis dang lung gi gter drin can Bla ma Don grub rgya mtsho

1. 文殊怙主上師座主ガワンロトゥギャンツォ ('Jam mgon bla ma khri rin po che Ngag dbang blo gros rgya mtsho, 1635-1688)
2. 上師トゥンドゥブギャンツォ (Bla ma Don grub rgya mtsho)
3. 大持金剛ゲンルン化身ロブサンチュエデン (rDo rje 'chang chen po dGon lung sprul sku Blo bzang chos ldan, 1642-1714)
4. シェーラブジンパ (Shes rab sbyin pa)

このうち、最初のガワンロトゥギャンツォを「師父 (yab)」として、後三者は、その「筆頭弟子 (sras kyi thu bo)」と表現されている。この記述から、ガワンロトゥギャンツォがシェーラブジンパの師に当たることが確認されるのである。

このガワンロトゥギャンツォという人物は、実は、ジャムヤンシェーパが二十一歳の年 (1668年) にゴマン学堂に入寺した際の座主であり、ジャムヤンシェーパに沙弥戒を再度授け、入寺を許可したルンブム・ロトゥギャンツォ (Klu 'bum Blo gros rgya mtsho) に他ならない (以下、ロトゥギャンツォと称する⁹)。彼は三十一歳の木巳年 (shing sbrul, 1665) に第28代ゴマン学堂長に就任、以後九年間 (1665-1673) 学堂長を務め、さらに1682年には第44代ガンデン座主に就任したことが知られている。ジャムヤンシェーパがゴマン学堂において師事した主要な師の一人でもある¹⁰。このことから、シェーラブジンパは、ジャムヤンシェーパの師であるのみならず、その兄弟子にも当たることが判明する¹¹。

ジャムヤンシェーパは、『大教義書』において、このシェーラブジンパを、「五大難解書等の正理を語る者のうち当代の地上において無比なる正理の主シェーラブジンパ」と評していることは注目¹²に値する。ここで「正理の主 (rigs pa'i

dang/ (2) mdo sngags kun dang lung rtogs gnyis ka'i mnga' bdag rDor rje 'chang chen po dGon lung sprul sku Blo bzang chos ldan dang/ (3) dka' chen lnga sogs rigs pa smra ba la deng dus kyi sa'i steng na 'gran zla bral ba rigs pa'i dbang phyug Shes rab sbyin pa ste yab sras bzhi'o/(番号付け及び下線は筆者による)

9 『クンケン伝』 p. 22参照。

10 ルンブム・ロトゥギャンツォの略伝は、『黄瑠璃史』 p. 93.8-14; 『雪域歴代名人辞典』 p. 68f. に見られるほか、『ゴマン学堂史』 pp. 52-56, 239に詳しい。彼のゴマン学堂長就任年と在任期間は、『ゴマン学堂史』 p. 55.9f. による。

11 ジャムヤンシェーパがゴマン学堂において師事した師と聴聞した典籍の一覧については、西沢 2011, Vol. 1, p. 638f. 参照。

dbang phyug)」という呼称は、チベットでは、かの『量評釈』(*Pramāṇavārtika*)の著者ダルマキールティ (Dharmakīrti) か、あるいは、サンブ寺の大学僧チャパ・チューキセンゲ (Phya/Phywa/Cha pa chos kyi seng ge, 1109-1169) を指すのが一般的であるが、論理学に殊に通達した者に与えられる呼称であり、シェーラブジンパが五大学課の中でも特に論理学に通達していたことを示唆している。このことは、後で紹介するように、ジャムヤンシェーパの伝記資料からも確認されるところである。

シェーラブジンパの年代については、正確な生没年は知られていないが、上述した通り、ロトゥギャンツォ (1635-1688) の筆頭弟子の一人にして、後で紹介するように、ジャムヤンシェーパ (1648-1721) が二十四歳 (1671年) の頃に師事した師である。ロトゥギャンツォの三大弟子の上記の順序が年代順であるならば、上師トゥンドゥブギャンツォと大持金剛ゲンルン化身ロブサンチューデンよりも年少の同時代人であることになる。このうち、トゥンドゥブギャンツォは、師のロトゥギャンツォの後を継いで、第29代ゴマン学堂長を務めたオロト・トゥンドゥブギャンツォ (O rod Don grub rgya mtsho, alias, Thor god Don grub rgya mtsho) に当たる¹³。「オロト (O rod)」と称されるように、モンゴルのオイラト (Oirad/ Oyirad) の人である。彼の年代は不明であるが、ロトゥギャンツォの弟子とは言え、その後を継いでゴマン学堂長を務めた人物であるので、年齢的にはロトゥギャンツォよりそれほど大きな開きはなかろう。ほぼ同世代と思われる。

その後に言及されている大持金剛ゲンルン化身ロブサンチューデンは、チャンキャ二世ガワンロブサンチューデン (lCang skya Ngag dbang blo bzang chos

12 『大教義書』p. 639.6-7参照。なお、このことは、後で紹介するシェーラブジンパの律の作品 (*'Dul ba'i dus tshigs gsal byed nyi ma*) の活字本テキストの序文 (sngon gleng) に言及されている。同書 p. d 参照。

13 この人物の略伝は、『ゴマン学堂史』p. 57f. を参照。『黄瑠璃史』所収のゴマン学堂長の系譜にもその名が確認される (同書 p. 134.2)。

14 彼の略伝は、『雪域歴代名人辞典』pp. 527-529; 『トゥンカル大辞典』p. 797f. に見られるほか、『ゴマン学堂史』pp. 527-533に詳しい。チャンキャ一世タクパウセル (Grags pa 'od zer, ?-1641) の化身とされ、さらにその化身に当たるチャンキャ三世は、『チャンキャ教義書』(*lCang skya grub mtha'*) で著名なチャンキャ・ロールペードルジェ (lCang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786) である。

ldan) に他ならず、1642-1714年という生没年が知られている。シェーラブジンパがロプサンチュエデンの後輩に当たるのであれば、シェーラブジンパの年代は、それよりも幾分後方にずらしたものとなる。但し、弟子のジャムヤンシェーパの年代は、1648-1721年なので、その前に位置付ける必要がある。今は、その中間を取って、1645-1715年頃の人物と考証しておきたい。仮にこの三大弟子の順序が年代順でないとしても、師であるロトゥギャンツォ (1635-1688) と弟子であるジャムヤンシェーパ (1648-1721) の間に位置付けられることはほぼ疑いないので、大きな誤差は考え難い。もしこの年代考証が妥当であれば、シェーラブジンパは、ジャムヤンシェーパの師であるとも言え、年代的にはほぼ同世代の先輩に当たる人物と云えよう。ちなみに、シェーラブジンパには、後述するように、1675年に著作した律の作品が残されているので、それまで生存していたことは疑いが無い。

このシェーラブジンパの律の作品は、後述するように、ゴマン学堂で教科書のように使用されているものであるが、シェーラブジンパが一連のゴマン学堂の僧侶と師弟関係にあること、彼がモンゴル人であることと併せて鑑みるに、シェーラブジンパは元々ゴマン学堂の僧侶であった可能性がある。実際、モンゴル人とゴマン学堂は密な関係にあり、多くのモンゴル人がゴマン学堂で修学したことは夙に知られた事実である。この点はまだ憶測の域を出ないが、一つの可能性として示唆しておく。

以上、ジャムヤンシェーパの『大教義書』を資料として、シェーラブジンパに関する情報を収集した。シェーラブジンパに言及した記述自体は非常に短いものであるが、そこから、幸い彼の年代や師弟関係などについてかなり有益な情報を抽出することが出来たことになる。そこで次に、ジャムヤンシェーパの伝記文献を資料として、シェーラブジンパの事績に関する情報を集めておこう。

ジャムヤンシェーパの生涯と事績については、クンチョク・ジクメワンポ (dKon mchog 'jigs med dbang po, 1728-1791) による『クンケン伝』やジャムヤンシェーパ自身による『クンケン自伝』(未完)を資料として既に拙稿において紹介したが¹⁵、まず最初に、ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパと初めて出会

15 西沢 2011, Vol. 1, pp. 634-669参照。ジャムヤンシェーパの自伝 *rNam thar bka' rtsom tshigs bcad ma* は、セフォリオからなる偈体の小品であり、奥書も記されていない未完の作品である。内容は、ゴマン学堂の履修課程を終えて、ギュメ学堂

った経緯については、『クンケン伝』では、こう述べられている。

「御年二十五歳（1672）の時、中観学級（dbu ma'i 'dzin grwa）に進級した。『[入中論] 解説密意解明』（*rNam bshad dgongs pa rab gsal*, Toh 5408）を暗記して、中観の修学を徹底的になさった。その年に、「カチュ」（dka' bcu, 十難解書 [に通達した者]¹⁶）という称号を得ようとお考えになって、サ

(rGyud smad grwa tshang) での密教研究の途中で終わっている。但し、年齢や年代、師事した師や具体的な修学内容等が明記されている詳しいものであり、他ならぬジャムヤンシェーパ自身の手になるものなので、彼の伝記研究においては第一級の資料的価値がある重要な文献である。他方、これに基づき他の諸情報を追加したジャムヤンシェーパの全生涯にわたる詳細な伝記が、ジャムヤンシェーパの第二代化身として知られているクンチョク・ジクメワンポにより記されている。このジクメワンポの『クンケン伝』は、奥書（同書 p. 243）によれば、「地寅年七月上旬（sa stag zla ba bdun pa'i yar tshes）」にデブン寺で著作され、さらにその後ドメ（mDo smad）において加筆したものである。これは、1758年、ジクメワンポが三十一歳の時の作品である。

16 dka' bcu pa のこと。bka' bcu pa とも表記される。これは四大仏典（bka' chen bzhi, alias, dka' chen bzhi, 四大難解書）の上にさらに六つの仏典を加えた十の仏典に関して問答の試問を行い合格した者を云う。四大仏典については、中観・般若・律・俱舍（dbu phar 'dul mdzod）の四つの主要仏典を指すとするのが一般的であるが（『藏漢大辞典』p. 77）、論理学（『量評釈』）、般若、中観の三つに律と俱舍の何れかを加えた四つと解するものも見られる（『トゥンカル大辞典』p. 128）、これについては宗派や時代によって出入りが見られるようであり、例えば、ツォンカパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）は、修学時代にナルタン寺で「それ（＝般若）以外に残りの四大難解書のタコル（de ma gtogs pa'i dka' chen lhag ma bzhi'i grwa skor）」を行ったとされるが（『ツォンカパ大伝』18b1；石濱/福田 2008, p. 56）、その四つとは、『量評釈』、上下の阿毘達磨（mngon pa gong 'og, i.e., 『阿毘達磨集論』と『俱舍論』）、『根本律經』の四つであったとされる（『ツォンカパ伝』p. 118.1）。それ故、その四つの典籍は決して固定化されたものではなく、その時代と状況に応じて選択されたものと推定される。このことは十典籍についても同様である。

四大仏典に通達した者である「カシバ（bka'/dka' bzhi pa）」の呼称は、ケードゥブジェ（mKhas grub dge legs dpal bzang, 1385-1438）の『ツォンカパ大伝』に散見するので（同書14a5、19b1、21b5）、既にツォンカパの時代に成立していたことは疑いないが、このカチュパの呼称は、ツォンカパの二大弟子の一人であるタルマリンチェン（Dar ma rin chen, 1364-1432）を端緒とすると云われている。カチュパの後には、サキヤ派のチャムチェンラブジャムパ・サンギェペル（Byams chen rab 'byams pa Sangs rgyas 'phel, 1411-1485）を端緒として、後で言及される「ラブジャムパ（rab

ンブ寺に赴いた。… [中略] …それから、無数の学識者達の中央で、善説の獅子吼を完全になさって、カチュの称号を得た。その翌年に [サンブ寺で] 「黄法座のタコル (chos khri ser po'i grwa skor, i.e., rab 'byams grwa

'byams pa)」ないし「ラブジャムマワ (rab 'byams smra ba)」という称号が起こったが、その経緯については、サキヤ派のマントウ・ルドゥブギャンツォ (Mang thos klu grub rgya mtsho, 1523-1596) によりこう解説されている。

「カチュパ (bka' bcu pa) とは、ギェルツァブ・タルマリンチェンから起こったことは明らかであり、それ以前は、四大仏典 (bka' chen bzhi) として知られたものと、その四つの上に何れかを足して六つ程 [の仏典] についてタコルをなしたもののばかりが現れたが、ギェルツァブジェにより十帙 [の仏典] について解説する伝統が立てられて以来、「カチュパ (dka' bcu pa)」と云う呼称が知られるようになり、ポトン・チョクレーパ (Bo dong phyogs ras pa, i.e., Bo dong phyogs las rnam rgyal, 1376-1451) により、十五 [の仏典] について解説がなされたが、「ウンポ・カチュパ (dbon po bka' bcu pa)」というだけで、それ以外 [の呼称] は起こらなかった。他方、後に、チャムチェン・マウエーワンポ・サンギェペル (Byams chen sma ba'i dbang po Sangs rgyas 'phel, 1411-1485) 以降、「ラブジャムパ (rab 'byams pa)」と云う [呼称] もまた知られるようになった。しかしながら、カバ・シヨンスセンゲ (bKa' pa gZhon nu seng ge) 等、それ以前にも、「カバ (bka' pa, 仏典に通達した者)」の呼称が些か知られていたことは明らかである。」(『マントウ仏教史年表』 pp. 350.17-351.5)

実際、タルマリンチェンが十難解書に対してタコルを行ったことは、ケードゥブジェの言及するところであり (『ツォンカパ大伝』 37a1、石濱/福田 2008、p. 92)、同書では、タルマリンチェンを「ロボン・カチュパ (slob dpon dka' bcu pa)」と称している (『ツォンカパ大伝』 38b5、石濱/福田 2008、p. 95、etc.)。

- 17 この「黄法座のタコル」とは、文脈から判断して、ジャムヤンシェーパが翌年サンブ寺で行ったラブジャム・タコルを指す。これはサンブ寺において最高学位を得るための問答の試問である。「タコル」とは、諸僧院を巡り、問答の試問を受ける修行の一つである。「ラブジャム」とは、Mvyut no. 3063によれば、prasara の訳語で、限り無い広大さを示す用語であり、「無辺」と漢訳される。rab 'byams smra ba、あるいは、rab 'byams pa とは、語義的には膨大な仏典に通達した者を指す用語である。ゲルク派が出現する以前に、ウーの六大寺 (デワチェン寺、サンブ寺、ツェル・クンタン寺、ガワドン寺、キョルモルン寺、スルブ寺) において最高学位を指す称号は特になかったが、サキヤ派のチャムチェンラブジャムパ・サンギェペル (1411-1485) が、ウーの六大寺において五大仏典のタコルを行ったことを契機として用いられるようになった。これについては、前出の『マントウ仏教史年表』の他、『トゥンカル大辞典』 p. 1891f. 参照。

skor)¹⁷」を行うべく上申をもなさった。その頃、正理を語る一群の者達の最上の莊嚴である大学者ニマタンパ・シェーラプジンパ (rigs pa smra ba'i khyu rgyan dam pa mkhas pa chen po Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa) とお会いになった。その時分、論理学について彼に敵う者はないと非常に高名であったので、『[量] 評釈』(rNam 'grel) の難問をはじめ徹底的な質疑 (dri gtugs) を多数なさったところ、上師 (=シェーラプジンパ) もまた喜んで、「貴方のこれらの質問は難問であるので、私にも啓発されるところがある」と仰ったが、このことは、「賢者は賢者の前で美しい」(mkhas pa mkhas pa'i drung na mdzes)¹⁸ という逸話 (rnam thar) であるように見える。」(『クンケン伝』 pp. 33.1-34.12)

これによれば、ジャムヤンシェーパが最初にシェーラプジンパに出会ったのは、彼が二十五歳の年、即ち、1672年であり、ジャムヤンシェーパがカチュのタコルを行うためにサンプ寺を来訪した際に、シェーラプジンパに出会ったことになる。『クンケン伝』によれば、ジャムヤンシェーパは、その後デプン寺に戻り、師のロトゥギャンツォ (Blo gros rgya mtsho) に翌年サンプ寺でタコルを行うことについて許可を求めたところ、師はラサのモンラム・タコル (lHa sa smon lam gyi grwa skor) を行うように勧めたが、ジャムヤンシェーパはそれを固辞したことが伝えられている。¹⁹ その後、ニマタン学堂にベンツァム (dpe mtshams)²⁰ に赴き、そこで再び、シェーラプジンパの下で、『量評釈』の講義を受けている。即ち、

18 『サキヤ善説』 116a: mkhas pa mkhas pa'i nang na mdzes.

19 『クンケン伝』 p. 34.17-21 参照。ラサのモンラム・タコルは、モンラム・タムチャー (smon lam dam bca') とも称するが、大モンラム祭 (smon lam chen mo, 大誓願祭) の際に、三大寺の僧侶達が五大仏典について執り行う問答の最終試問である。大モンラム祭自体はツォンカパの創始によるが、その際に、問答の試問を執り行い、その優劣に応じて受験者に順位を付け、ゲルク派の最高学位「ゲシェ・ララムパ (dge bshes lha rams pa)」の称号を授ける慣習は、1613年に、パンチュンラマ四世ロブサンチュエーキギェルツェン (Paṅ chen blo bzang chos kyi rgyal mtshan, 1570-1662) が大モンラム祭の大会責任者 (tshogs dbu) を六年間務めた際に新たに設けられたと云われる。『トゥンカル大辞典』 p. 1648 参照。

20 ベンツァム (dpe mtshams) とは、特に典籍 (dpe cha) を暗記するために行われるツァム (mtshams/ sku mtshams, 独居行) の一種である。

「それから、ニ [マ] タン・ラブラン (Nyi thang bla brang)²¹ にペンツ
 ヲムに赴き、学堂教科書の中観 [の典籍]²² (grwa tshang gi yig cha'i dbu
 ma) と、ケツェル・ケンボ・ジャムヤンクンガーチューサン (sKyed tshal
 mkhan po 'Jam dbyangs kun dga' chos bzang, 1433-1503)²³ により著作された
 『律・聖言と正理の宝蔵』 ('Dul ba lung rigs gter mdzod) の二つを心に習
 熟するまで暗記した。『[量] 評釈』は以前から暗記し終わっていたが、
 再び、ニマタンの師 (Nyi ma thang dpon slob, i. e., Shes rab sbyin pa) の下
 で、詳細な講義 (zhib khrid) [を受け、] 質疑 (dogs gcod) を詳しくなさ
 り、[その後] 再び、デブン寺に戻った」(『クンケン伝』 pp. 34.21-35.5)

翌年の1673年の春にサンブ寺を再度来訪し、サンブ夏期法苑 (gSang phu
 dbyar chos) の際に、サキヤ派とゲルク派の十一の学堂から僧衆が集まった中央
 で、五日間に渡り、五大典籍のタムチャー (問答試問) を行い、ラブジャムマワ
 (rab 'byams smra ba) の称号を得た。²⁴ これはゲルク派の最高学位であるゲシ

21 ここでニタン (Nyi thang) とは、ニマタン (Nyi ma thang) の省略形であり、ラ
 ブランとは、通常、「トゥルク (sprul sku, 化身)」と称される高僧の住居を指すが、こ
 の文脈では、ニマタン学堂の或る特定のトゥルクの住居ではなく、恐らくニマタン学
 堂そのものを指すものと推察される。

22 ここで言及されている「学堂教科書」がニマタン学堂の教科書とゴマン学堂の教科
 書の何れを指すのか判然としないが、前後の文脈から判断してニマタン学堂の中観の
 教科書を指す可能性がある。『黄瑠璃史』(1698年造)によれば、当時ニマタン学堂で
 は、中観と般若の教科書はセラジェツウンパ (Se ra rje btsun chos kyi rgyal mtshan,
 1469-1544) の著作を使用していたとあるので (『黄瑠璃史』 p. 148.19)、もしこの推定
 が妥当であれば、この時、ジェツウンパの中観の著作、恐らくは、中観総義 (dbu ma'i
 spyi don) を暗記したことになる。

23 十五世紀のサキヤ派の学僧。彼の略伝については、『雪域歴代名人辞典』 p. 630f. 参
 照。それによれば、ケツェル寺でチャムチェンラブジャムパ・サンギェベルに師事し
 て顕密の多数の典籍を修学した人物である。ジャムヤンシェーバが何故にニマタン学
 堂でサキヤ派の学僧の律の著作を暗記したのは定かではない。『黄瑠璃史』によれば、
 ニマタン学堂では律と俱舎の教科書は特に定められておらず、『黄瑠璃史』著作時
 1698年頃には、律はセラジェツウンパの弟子であるデレクニマ (bDe legs nyi ma) の
 著作を使用していたとある (『黄瑠璃史』 p. 148.20)。委細不明だが、サキヤ派の多く
 の学堂を擁するサンブ寺では、当時、ジャムヤンクンガーチューサンの律の著作が教
 科書として一般的に使用されていたのかもしれない。

24 『クンケン伝』 pp. 35.18-36.21参照。

ェ・ララムパ (dge bshes lha rams pa) に実質的に相当するものである。ゲシェ・ララムパの称号を得るためには、ラサの大モンラム祭 (smon lam chen mo) の際にタムチャーを行う必要があるが、前述したように、ジャムヤンシェーパはそれを固辞して、代わりに、サンプ寺でタムチャーを行い、ラブジャムマワの称号を得たわけである。何故に、大モンラム祭でタムチャーを行わずに、わざわざサンプ寺でタムチャーを行ったのかは『クンケン伝』には明記されていないが、後で紹介する自伝によれば、サンプ寺の師であるシェーラブジンパの指示であったことが分かる。このことは、ジャムヤンシェーパにとってシェーラブジンパの影響力の大きさが如何なるものであったかを如実に示唆するものである。

サンプ寺でタムチャーを行った際には、ニマタン・ラブランからも厚い供養を受け、再度、師であるシェーラブジンパと会合して久しく討論を重ねたことが伝えられている。その際の師弟の興味深い会話が『クンケン伝』に引かれているので、引いておこう。

「この大徳 (rJe 'di, i. e., ジャムヤンシェーパ) が、「貴方は如何なる誓言 (thugs dam) をお立てになっているのか」と質問したところ、[師シェーラブジンパは]「取り立てて誓言という程のものはない。朝、夜が明けてから晩まで、晩もまた、少しでも空いた時間があれば、教典を見て、寝る前には、「今日は教典についてこのような聞思を行い、これこれの啓発を受けた。大いなる福德があらんことを」と心に憶い、善行を教法と衆生のために廻向し、瞻部州の者は睡眠の地に属するもの (gnyid kyi sa pa) であるので、睡眠によりこの身体を養い、翌日もまた、教典を研究しようと発奮して、後日もその通りに行う」と仰ったので、この大徳 (=ジャムヤンシェーパ) の御心にも、[自分も] その通りにしようとお考えになり、[師に対する] 信仰もまた以前よりも無比なるものが起こった。後にも、「私のそれらの上師達の中で、ニマタンパ (=シェーラブジンパ) は高い見識 (rtogs pa mtho ba) がある。彼の誓言を立てる仕方はこのようなものである」と繰り返し称賛なされた。」(『クンケン伝』p.37.6-18)

以上、『クンケン伝』を資料として、ジャムヤンシェーパとシェーラブジンパの交流について紹介した。『クンケン伝』によれば、ジャムヤンシェーパは、1672年、中観学級に進級した年に、サンプ寺でカチュ・タコルを行い、翌年のサンプ夏期法苑の際に、同じくサンプ寺でラブジャム・タコルを行った。つま

りサンプ寺では1672年と1673年に二度タコルを行ったわけだが、シェーラプジンパに出会ったのは、1672年のカチュ・タコルの際とされる。

これに対して、ジャムヤンシェーパの自伝では、シェーラプジンパに出会った時期について、些か齟齬が見られるので、次に自伝を資料として、この一連の経緯を追っておこう。当該部分の訳文は以下の通りである。

「二十五歳の水子年 (cha bya'i (read: byi'i) lo, 1672) に、中観と『[量] 評釈』を法苑で共に暗記して (chos grwar zung 'dzin)、内々にも (nang du yang)、俱舎と律 (mdzod 'dul) を暗記し終わった (gzung zin²⁵)。二人の善知識 (bshes gnyen dam pa gnyis) は [大モンラム祭で] タコルを行うよう仰ったが、²⁶ [それを] 受け入れずに、参拝の [一つの] 仕方として (mchod mjal tshul du)、サンプ寺で、『[量] 評釈』に対する自分の新しい註釈 (rang tik gsar pa²⁷) に基づき、カチュ [・タコル] (dka' bcu [grwa skor]) を行った。

その前年 (de'i snga lo, 1671)、解説・問答・著作 ('chad rtsod rtsom) に対

25 『クンケン伝』に明記されているように、ジャムヤンシェーパは、二十五歳の年に中観学級に進級したので、「法苑」即ち学級 ('dzin grwa) で問答を通じて学ぶべき中観のテキスト及び『量評釈』を暗記したが、そのみならず、上の学級で学ぶべき俱舎と律の典籍もまた、「内々に」即ち個人的に暗記したという意味。ゲルク派では、論理学 (=『量評釈』) の研究は、独立した学級ではなく、一年に一ヶ月半程ジャン冬期法苑 ('Jang dgun chos) の際に修学する慣習があるので、中観とともに論理学をも兼学したことがこの記述から窺われる。しかし、『クンケン自伝』及び『クンケン伝』には、ジャン冬期法苑に対する明示的な言及は確認されないので、この時代にはまだジャン冬期法苑という呼称や制度が確立していなかった可能性もある。その点については今後の検討課題である。但し、ジャン冬期法苑が成立していたにせよいなかったにせよ、中観学級の際に論理学を法苑で修学したことについては、ここに明記されているので、疑いないところである。

26 『クンケン伝』によれば、二人の善知識のうちの一人は、学堂長ロトゥギャンツォであり、大モンラム祭でタコルを行うよう要請したことを指しているのであろう。『クンケン伝』 p. 34.17-20参照。『クンケン伝』にはもう一人が誰かは明記されていない。

27 ジャムヤンシェーパが現存する『量評釈』第一章の精解を著したのは、53歳の年、1700年である。『クンケン伝』 p. 85.12参照 (西沢 2011、Vol. 1、p. 649)。それ故、ここで「自分の新しい註釈」はそれとは別のものである。これは全集に収録されている作品ではなく、修学時代に記した覚書程度のものであろう。

して文殊その者となった(=文殊ご自身の如くに通達した) プラジュニャーダーナ (Prajñādāna, alias, Shes rab sbyin pa) の下で、論理学、律、阿毘達磨 (tshad ma 'dul mngon) の難解な箇所を半月余り (zla phyé lhag)、詳細に聴講した或る時分、冬の夜が明け日が昇るまで研究した。その善知識 (=シェーラプジンパ) はお喜びになり、お互いに心が一つになった (phan tshun sems gcig byung)。

その年 (1672) に、カンギェルワ (bKa' 'gyur ba²⁸) とメルゲン (Mer rgen (read: rgan)²⁹) から、[ゲンドゥンドゥプ造]『律註宝環』('Dul tik rin chen phreng [ba], Toh 5523) 等の多くの法を得た (=聴聞した)。

水丑年 (chu glang lo, 1673) には、[ゴマン学堂の] 法苑で中観と論理学の二つ (dbu tshad gnyis) [を主に修学し]、俱舎についてもまた [講義を] 傍聴 (zur nyan) したが、³¹ サンプ寺で、文殊怙主シェーラプジンパ (Jam mgon Shes rab sbyin pa) が、前年 (snga lo, 1672) より、「ここ (=サンプ寺) でラプジャム [・タコル] を行え ('di ru rab 'byams gyis)」と仰っていた通りに、五帙 [の典籍]³² に対して五日間タムチャーを行ったので、ラプジャムマワの端緒はここから開かれた (rab 'byams smra ba'i thog ma de nas tshugs)。他の帙についても、[問答の際は] 回答は寝ていないだけのもの³³ で (lan ni ma gnyid tsam)、論理学 [の問答] の際に [も]、手を

28 パンチェン・カンギェルワ・ジンパギャンツォ (Pañ chen bka' 'gyur ba sbyin pa rgya mtsho) のこと。『クンケン自伝』5b1参照。

29 メルゲンラマ・ガワンロトウ (Mer rgen bla ma Ngag dbang blo gros) のこと。『クンケン自伝』5b5参照。

30 以下の文章は、『クンケン伝』に、bka' rtsom からの引用として引かれている。『クンケン伝』p. 36.14-21参照。

31 当時、ジャムヤンシェーパは中観学級に所属していたので、上級の学級で学ぶべき俱舎については、法苑で問答はせずに講義だけ傍聴したという意味。既に前年に俱舎と律を暗記し終えたとあるので、ジャムヤンシェーパが学級内で修学する学課のみならず、自ら進んでより上級の学課をも個人的に修学していたことが窺われる。

32 論理学、般若学、中観学、律学、俱舎学の五つの根本典籍のこと。即ち、『量評釈』、『現観莊嚴論』、『入中論』、『律経』、『俱舎論』の五つを指す。

33 『クンケン伝』では以下の記述に対応している。『クンケン伝』p. 36.8f: po ti gzhan gyi nyin khong tshos ham pa byas kyang kha rog bzhugs/「他の帙 [について問答する] 日には、彼ら (=サンプ寺の質問者達) は、大口を叩いたが、黙然としていた。」

少し抜いた³⁴ (lag cung zad phyung)。しかしながら、[質問者と答論者は]
相互に智慧と取り分け喜びが増した³⁵ (on kyang phan tshun rnam dpyod lhag
dga' rgyas)。稀有にして偽りのない予兆 (ltas mtshan) もまた幾つか起こ
った。」(『クンケン自伝』 5b6-6a5)

ここには、シェーラブジンパは二度に渡り言及されている。第一回目は、
「プラジュニャーダーナ (Prajñādāna)」という梵語名で言及されているが、
1671の年の冬に、ジャムヤンシェーパは、彼の下で、論理学、律、阿毘達磨の
難解な箇所を半月余り詳細に聴講したと記されている。『クンケン伝』では、ジ
ャムヤンシェーパがシェーラブジンパに最初に出会ったのは、1672年のことと
されるので、その点に食い違いが見られる。『クンケン伝』の著者であるクンチ

恐らくは、サンプ寺の質問者達が大口を叩いて、適切な質問をしてこなかったので、
それに対する回答も熱の入ったものとはならなかったという意味であろう。

- 34 『クンケン伝』では以下の記述に対応している。『クンケン伝』p. 36.9-12: *rNam 'grel*
gyi nyin thugs ngar ngar byas te "khyed tsho la yod na de ring thong shog" gsungs
pas/ khong tsho'i khrod nas dge bshes dregs par rlom pa mtha' dag langs nas bgro
gleng byas par gcig gis kyang rigs lung ma song bas kha skyengs/『[量] 評釈』
[について問答する] 日には、[ジャムヤンシェーパは] 血氣盛んに、「貴方がたに [何
か問答すべきことが] あるならば、今日 [問答] してきなさい」と仰ったので、彼ら
(=サンプ寺の質問者達) の中から [自分の学識に] 自惚れている善知識は全て立ち上
がり討論したが、一人として正理と聖言が至らなかったで、恥じ入った。」

つまり論理学に関する問答では誰もジャムヤンシェーパに敵わなかったので、回答
するに際して些か手を抜いたという意味であろう。

- 35 『クンケン伝』では以下の記述に対応している。『クンケン伝』p. 36.12-14: *'on kyang*
thams cad kyis "da lo'i grwa skor pa 'di 'dra'i dge bshes" zhes blo gzu bos bsngags
brjod kyī me tog 'thor bar byas so//「しかしながら、[サンプ寺の] 全ての者達は、「今
年のタコルパ (=タコルを行う者) はこれ程の善知識だ」と素直な心で讃辞の花を撒
いた。」

rnam dpyod lhag dga' rgyas の構文が些か判然としないが、*rnam dpyod dang lhag*
par dga' ba rgyas の意味で解釈しておく。

- 36 ジャムヤンシェーパの未完の自伝は、*rNam thar bka' rtsom tshigs bcad ma* と称
されるが、この書名は *bka' rtsom* (御著作) という敬語が使用されているところから
も、ジャムヤンシェーパ自身により名付けられたものではなく、後代の弟子筋に当た
る者により付けられたものと推定される。年代的に見てジャムヤンシェーパの自伝を
bka' brtsom と称するのは、ジクメワンポに端を発する可能性もある。

ヨク・ジクメワンポは、無論この自伝を見ており、「御著作 (bka' rtsom)³⁶」という名でしばしば引用もしているが、この「プラジュニャーダーナ」という人物が、シェーラブジンパを指すことに気が付かなかった可能性もある。実際、『クンケン伝』では、ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパから修学したのは、『量評釈』としか記されおらず、他にも律や俱舎を学んだことについては言及が見出されない。それ故、ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパと出会った年は、ジャムヤンシェーパ自身が明記しているように、1671年と考えておきたい。

第二回目の言及は、1673年にサンプ寺で行ったラブジャム・タコルに関する記述の中に見出されるが、そこでは、前年、即ち、1672年に、シェーラブジンパがジャムヤンシェーパにサンプ寺でラブジャム・タコルを行うよう命じていたことが明記されている。『クンケン伝』によれば、デブン寺での師匠にして座主でもあるロトゥギャンツォの指示に背いてまで、サンプ寺でタコルを行うことに固執したが、その背景には、シェーラブジンパの強い影響力があったことが見て取れるのである。ジャムヤンシェーパ自ら、自身とシェーラブジンパについて、意気投合し、「お互いに心が一つになった」とまで明記していることは、両者の絆の強さを如実に表していると言えよう。自伝において、「参拝の[一つの] 仕方として (mchod mjal tshul du)」、サンプ寺でカチュ・タコルを行ったとあるが、これは、前年に師事したサンプ寺のシェーラブジンパの学恩に報いる意味合いを示す文章と思われる。ここに「参拝」と訳した mchod mjal という語は、一般に、供養 (mchod pa) の対象である三依 (rten gsum)、即ち、仏像、経典、仏塔にお会いすること (mjal ba) を意味し、具体的には三依を備えた寺院へ参拝することを意味するが、師の居寺ニマタン学堂の本山であるサンプ寺に参拝することを通じて、師に対する供養となしたのであろう。

以上、ジャムヤンシェーパの伝記資料から、シェーラブジンパに関連する記述を紹介した。ここからシェーラブジンパがジャムヤンシェーパの修学時代の主要な師の一人であり、ジャムヤンシェーパに大きな影響力を与えた人物であることが確認されたことになる。シェーラブジンパの伝記資料が得られない現状、今後同様の情報収集を積み重ねることを通じて、いわば外側からシェーラブジンパの人物像をより明確なものとして浮き彫りにしていくことが必要となっている。

2. シェーラプジンパの著作

シェーラプジンパの著作については、仏教電子資料センター (Buddhist Digital Resource Center, abbr. BDRC, i. e., TBRC) のデータベースによれば、以下に紹介する大谷大学図書館所蔵の一連のウメ書体の写本以外には情報がなく、知られているところは余り多くない。³⁷しかるに、シェーラプジンパはモンゴル人であるところから、モンゴルに彼の諸著作が保存されている可能性があり、実際、モンゴル国立図書館 (National Library of Mongolia) には、彼の二作品の木版本が所蔵されていることが判明した。そこで、以下に現時点で知られているシェーラプジンパの著作について紹介しておこう。

(1) 大谷大学図書館所蔵のテキスト

ニマタンパ・シェーラプジンパの著作については、中観学、論理学、般若学の以下の八作品が大谷大学図書館に所蔵されている。

1. *Nyi ma thang dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i bDen gnyis kyi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された二諦精解) [Ota 13949: Ca. 1-15b4]
2. *Nyi thang dBu ma'i tshad 'gog [gi mtha' dpyod]* (ニタン中観量否定 [精解]) [Ota 13950: Ca. 1-24b4]
3. *Nyi ma thang bla ma Shes rab sbyin pa'i Chu 'bab kyi mtha' dpyod* (ニマタン上師シェーラプジンパの水流精解) [Ota 13951: Ca. 1-13a4]
4. *Nyi ma thang dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i dBu ma dus gsum rnam gzhag gi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された中観三時設定精解) [Ota 13952: Ca. 1-16b8]
5. *Nyi ma thang pa dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i dBu ma bdag 'gog gi mtha' dpyod* (ニマタン師シェーラプジンパにより著作された中観我否定精解) [Ota 13953: Ca. 1-26a3]

37 2017年9月現在の情報である。TBRC は、Tibetan Buddhist Resource Center の略語であり、BDRC の旧名である。url は、<https://www.tbrc.org/>

38 写本では、mdzad pa'i が重複して記されているが、明らかに誤記なので、修正しておく。

6. *Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pas mdzad pa'i gZhan sel gyi mtha' dpyod*(ニマタンパ・シェーラプジンパにより著作された他者排除精解) [Ota 13954: 1-10a8]
7. *Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pas mdzad pa'i Phar phyin skabs don po'i bka' bstan bcos yan gyi mtha' dpyod*(ニマタンパ・シェーラプジンパにより著作された般若第一章「仏言・論書」までの精解) [Ota 13956(1): Tha. 1-41a1]
8. *Nyi ma thang pa'i Don bdun cu'i skabs gnyis pa gsum pa bzhi pa lnga pa rnams* (ニマタンパの七十義の第二章・第三章・第四章・第五章) [Ota 13956(2): Tha. 1-19a6]

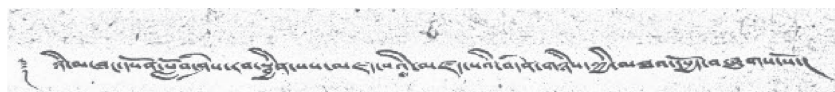
これらは、何れも隠字体で記されたウメ書体の写本であるが、このうち最初の六つの作品については、その影印版が大谷大学真宗総合研究所から出版されている。

サンブ僧院ニマタン学堂長シェラプジンパ著『中観学説決択集 原本複製 付解題』（大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書3）臨川書店、1990。

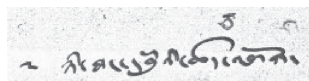
このうち、前五者は、チャンドラキールティ（Candrakirti）の『入中論』（*Madhyamakāvatāra*）第六章（第六発心）に対する註釈であるのに対して、最後の著作は、論理学の一主題である他者排除論（anyāpoha 論）を論じた独立の作品である。ゲルク派の学堂教科書は、概して、より一般的な概説書である「総義（spyi don）」と、問答の争点となる細かい主題を解説した「精解（mtha' dpyod）」という二つの形式により記されているが、ここに収められた作品は全て精解に当たる。但し、ゲルク派では、般若総義（Phar phyin spyi don）及び般若精解（Phar phyin mtha' dpyod）、中観総義（dBu ma'i spyi don）及び中観精解（dBu ma'i mtha' dpyod）、量評釈精解（rNam 'grel mtha' dpyod）等の形で著されるのが一般的であり、各学課ごとに独立した註釈を付けることはあまり見ないので、その点が特徴的である。

これら一連の作品の奥書には、著者名や著作地、著作年は明記されていないので、そこから書誌情報を得ることが出来ない。但し、表題には、著者名が明記されているので、この一連の著作がニマタン学堂のシェーラプジンパの作品であることが分かる。参考までに、以上の八作品の表題の部分のみを写本から

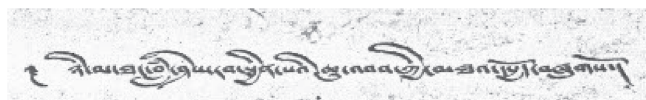
転載しておく。



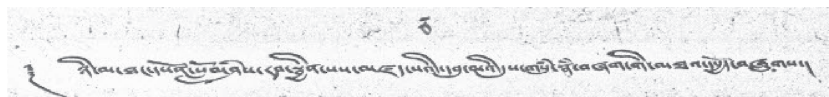
nyi ma thang dpon slob shes rab sbyin pas mdzad pa'i <mdzad pa'i>³⁹ bden
gnyis kyi mtha' dpyod bzhugs so.



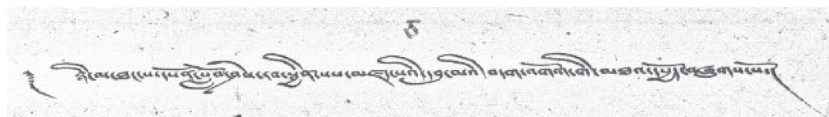
nyi thang dbu ma'i tshad 'gog.



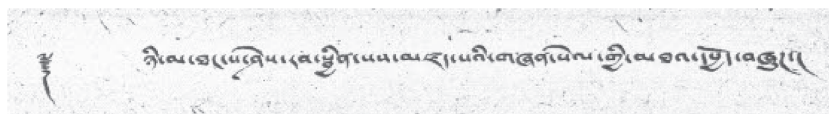
nyi ma thang bla ma shes rab sbyin pa'i chu 'bab kyi mtha' dpyod bzhugs so.⁴⁰



nyi ma thang dpon slob shes rab sbyin pas mdzad pa'i dbu ma'i dus gsum
rnam bzhag gi mtha' dpyod bzhugs.



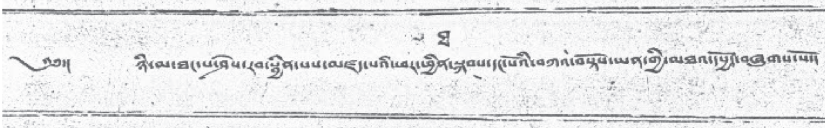
nyi ma thang pa dpon slob shes rab sbyin pas mdzad pa'i dbu ma'i bdag 'gog
gi mtha' dpyod bzhugs so.



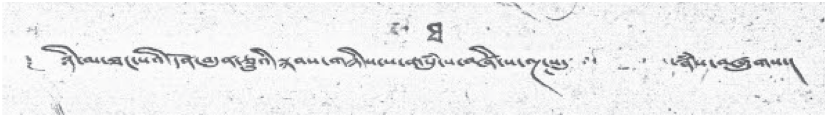
nyi ma thang pa shes rab sbyin pas mdzad pa'i gzhan sel gyi mtha' dpyod
bzhugs.

39 この〈...〉で括った語は重複しており、削除すべきである。

40 電子テキストでは、bla maではなく、dpon slobと記しているが、誤りである。



nyi ma thang pa shes rab sbyin pas mdzad pa'i phar phyin skabs dang po'i
bka' bstan bcos yan gyi mtha' dpyod bzhugs so.



nyi ma thang pa'i don bdun cu'i skabs gnyis pa gsum pa bzhi pa lnga pa ⁴¹(?)...
rnams bzhugs.

この表題には、「著作された／なされた (mdzad pa)」という敬語が使用されているので、シェーラプジンパ自身が付けたものではなく、後代の人物、恐らくは、彼の弟子筋に当たる誰かが付けたものである。また表題の書体や書式は一貫しておらず、筆跡も大部分別人の手になるものと推定される。

(2) モンゴル国立図書館所蔵のテキスト

モンゴル国立図書館には、未整理の膨大な作品群が所蔵されていることは夙に知られているところであり、その目録作成作業は、アジア古典入力プロジェクト (Asian Classics Input Project, abbr. ACIP) により着手されてきた。その尽力により、部分的にはあるが、電子目録が作成されており、検索可能な状態となっている。⁴²それによれば、同図書館には、シェーラプジンパの律と論理学の

41 この箇所は文字が良く判読できない。lnga の後のツェクの下の子文字不明。その直後の pa の後はツェクのはずだが、シャブキュ (zhabs kyu) が付いているように見える。これが何を指すのかも不明。『大谷西藏文献目録』p. 636では、lnga pa と転写しているので、その読みに従っておく。

42 大谷大学大学院のモンゴル人留学生ボルマー (Arildii Burmaa) 氏を通じて、モンゴル国立図書館の司書の方に確認したところ、モンゴル国立図書館が所有するチベット語仏教文献のコレクションは100万巻以上あるが、そのうち電子目録に入力されたものは約25万点であり、多く見積もっても全体の1/4弱に過ぎない。その約25万点のうち、木版本は凡そ7割を占め、残りの3割は写本である。但し全ての木版本のコレ

二作品の木版本が所蔵されていることが判明したので、ここに紹介しておく。⁴³

1. *Lung dang rig[s] pa'i gter chen po legs par bshad pa'i dus tshigs
gsal bar byed pa'i nyi ma zhes bya ba bzhugs so.* 目録番号：
M0054824-017. 1a-50a (7行). 54.0×7.0 cm.
2. *Kun mkhyen nyi ma thang ba shes rab sbyin pa'i zhal nga nas
kyis mdzad pa'i gzhan sel gyi dpe tshig bzhugs so.* 目録番号：
M0055839-027. 1a-28a (6行). 46.0×7.0 cm.

以上の書誌情報は、同図書館の電子目録の情報による。このうち、前者の作品については、在印ゴマン学堂図書館から活字本の形で出版されており、後者については、そのコピーを入手することができたので、以下に、この二つのテキストについて些か解説を加えておきたい。

(a) シェーラブジンパの律の作品について：

モンゴル国立図書館の電子目録には、奥書 (dpar byang, 出版後記) が転写されており、そこから同テキストの書誌情報を回収することが出来る。それによれば、同書は稀観書なので、テーデンチュンゼ・ロブサンガワン (Dad ldan chos mdzad Blo bzang ngag dbang) が出版し、デブン寺ゴマン学堂のゲンドウンジンパ (sGo mang bla ma dge 'dun sbyin pa) がその出版後記誓願文 (dpar byang smon tshig) を付した旨が明記されており、その末尾には、この版本はゴマン学堂の印刷所 (sGo mang par khang) に所蔵されていることが付記されている。⁴⁴ ちなみ

クションが電子目録に入力されているわけではなく、未整理のものもかなり残されている。この電子目録作成作業は ACIP により1999年に開始されたが、2011年5月に ACIP が経済的理由により撤退したので、現在は入力作業は殆ど停止しているとのことである。

43 この情報の入手にあたっては、ボルマー氏 (前出) の助力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

44 モンゴル国立図書館の電子目録に記載された奥書を転写しておく：ces Nyi ma thang bla ma shes rab sbyin pas mdzad pa'i dus tshigs kyi rnam bzhag 'di ni dpe rgyun dkon zhing/ rigs lam smra ba rnams la mkho che bas Dad ldan chos mdzad Blo bzang ngag dbang nas par du bskrun skabs par byang smon tshig dgos zhes srid na ring ba'i lha dang bcas bskul ngor sGo mang bla ma dGe 'dun sbyin pas bris pa'o// par 'di sGo mang par khang du bzhugs// // dge legs 'phel// //

に、この著作が稀観書であることは、『アク稀観書目録』に記載されていることから⁴⁵も確認されるところである。

この作品は在印ゴマン学堂図書館からも活字本として出版されているが、⁴⁶同活字本序文によれば、この作品は、ゴマン学堂で教科書のように使用されてきたものであり、インドではテキストが入手できず、モンゴルから入手したものである。⁴⁷著者自身の奥書 (mdzad byang) によれば、Prajñādānaśrī、即ち、シェーラプジンパーペル (Shes rab sbyin pa'i dpal) により、木卯年 (shing mo yos lo, 1675) ホル月二月に、ニマタン学堂で著作されたものである。⁴⁸奥書を具えた完本であり、奥書には、*Lung dang rigs pa'i gter chen po dus tshigs gsal ba'i nyi ma* という書名が明記されている。前述したように、ジャムヤンシェーパがサンプ寺でラプジャム・タコルを行ったのが、1673年なので、その二年後に記された作品である。

これと上記のモンゴル国立図書館所蔵本の関係が気になるところであるが、ゴマン学堂図書館刊行本は、その奥書によれば、出版後記誓願文は同文であるが、末尾にこのテキストがタシチューペル学堂 (bKra shis chos 'phel grwa tshang) において出版された旨が明記されている。⁴⁹そこから、このテキストは、上述のテーデンチュンゼにより出版されたテキストをタシチューペル学堂において再版したものであり、現在モンゴル国立図書館に所蔵されているテキストとは同系統ではあるが、全く同じテキストであるわけではないことが判明する。それ故、この律の作品については、同系統の異なる木版本が二本現存していることがここで確認されたことになる。ここでは便宜上、ゴマン学堂から刊行された

45 MHTL no. 11794: Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa'i *Dus tshig*/

46 これは、mKhan chen bsKal bzang dngos grub の律の著作と合本で以下の形で出版されている。

sPyir bstan gyi rnam bshad thub bstan rin po che gsal ba'i sgron me dang/
'Dul ba'i dus tshigs gsal byed nyi ma zhes bya ba bzhugs so. Mundgod: Drepung Gomang Library, 2005.

このうち、シェーラプジンパの作品は、同書 pp. 73-231 に収録されている。

47 同活字本序文 pp. d-e 参照。

48 同活字本 pp. 229.12-230.5 参照。

49 同テキスト奥書の末尾には、こう記されている。da khu re chen mor bKra shis chos 'phel grwa tshang du spar du bsgrubs// //

版本を「ゴマン版」、タシチューペル学堂において再版された版本を、「タシチューペル版」と称しておく。両版本の関係は不明だが、タシチューペル版も、デプン寺ゴマン学堂のゲンドウンジンパによって記されたゴマン版の出版誓願文を共有していることから、ゴマン版の再版本である可能性が高い。またゴマン学堂の印刷所から出版されていることから、このテキストがゴマン学堂で教科書として使用されてきたことが確認される。

(b) シェーラプジンパの論理学の作品について：

他方、後者の論理学のテキストについては、*gZhan sel gyi dpe tshig* という表題から、それが他者排除論を主題とするものであることは疑いない。問題は、大谷写本中の他者排除論のテキストとの関係であるが、幸い同木版本のコピー⁵⁰を入手することができたので、大谷写本と比較したところ、同一のテキストであることが確認された。それ故、シェーラプジンパのこの他者排除論のテキストには、写本と木版本の二本のテキストの現存が確認されたことになる。但し、両者の間には、一部かなり大きなテキストの出入りが見出されることも同時に確認された。その委細についてはここでは紙幅の関係上扱う余裕がないので、稿を改めて紹介することにした。

テキストの特徴としては、大谷写本では、中間偈 (*bar skabs kyi tshigs su bcad pa, antarśloka*)⁵¹で終っており、奥書は見出されないが、木版本では、この中間偈が欠落しており、代わりに、木版本の校訂者が加えたテキスト修正に関する一文と出版後記 (*dpar byang*) が付加されている。一般に中間偈は、或る主題とそれとは別の主題の間に置かれるものであり、テキストに末尾に置かれるものではないので、このことは、奥書が欠落していることと併せて、このテキストが

50 同テキストのコピーの入手に際しては、モンゴルのガンデン・テクチュンリン寺学術文化研究所のアムガラ (Norovtseden Amgalan) 氏の助力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

51 参考までに中間偈を引いておく。大谷写本10a8: *zab dang rgya che gzhung lugs rgya mtsho 'di/ blun po rnams kyis go bar dka' byed pa'i (read: pas?)/ mkhas dang grub pa'i dbang phyug khyed rnams kyis/ rig[s] pas dpyad na mig mthong blta mo che/ bdag gzhan rnams kyis (read: kyi) blo mun sel byed du/ dam pas bsngags pas spro ba mangs (read: mang) du 'phel/ ces pa'ang bar skabs kyi tshigs su bcad pa'o//*

未完の作品であることを示唆するものである。

また、木版本に付されたテキスト修正に関する一文から、この木版本のテキストには、一部校訂者により字句の省略や付加が加えられていることが判明する。参考までに当該箇所を引いておこう。

「[このテキストの] 第四フォリオの裏面には、[底本に見られる] yin pa srid pa'i bum pa yin pa gang zhig という [一文] が存在しないが、[仮になくても、内容的にテキストの] 脱落の過失 (chad pa'i skyon) とはならないので、記さないで置く。それと同様に、一つ二つ文字が置かれていない箇所 (=省略した箇所) もあり、一つ二つ文字を付加した箇所もあることに留意されたい。」(木版本28a2-3)⁵²

ここに言及された yin pa srid pa'i bum pa yin pa gang zhig という一文は、大谷写本では、文字通りの形では見出されないが、yin pa srid pa'i bum pa gang zhig という形で2b8と2b9の二カ所に言及されているものに当たると推定される。そして、この箇所は、木版本では確かに何れもこの一文が省略されている。しかし、その箇所は、この木版本では、第四フォリオの裏面ではなく、第五フォリオの表面 (5a3, 5a5) に当たり、半フォリオ程ズレが生じている。このズレが生じた理由が判然としないが、この周辺の箇所では、他にも二カ所ほど文字の省略が見出されるので、上述の記述はこの箇所を指していることはほぼ疑いない。このテキストについては、テキスト校訂と翻訳研究を予定しているので、委細は稿を改めて検討することにした。

なお、木版本の出版後記によれば、このテキストは、ゲシェ・ロブサンニエンタク (dge bshes Blo bzang snyan grags) という人物により出版されたものであるが、出版地や出版年については言及が見られないので、委細不明である。⁵³

52 shog gru (read: bu?) bzhi pa'i rgyab ngos na/ yin pa srid pa'i bum pa yin pa gang zhig// ces pa de med kyang chad pa'i skyon du mi 'gyur bas na/ ma bris pa yin la/ de sogs yi ge re re gnyis re ma bzhang pa yang yod/ yi ge re re gnyis re bsnan pa yang yod pa thugs la dgongs par mdzod//

53 参考までに、この出版後記の全文を転写しておく。木版本24a3-4: smras pa/ dge bshes Blo bzang snyan grags ming ldan pas// dpe 'di par du rko ru bcug pa'i dges// 'gro kun mdo sngags gzhung gi lam bzang la// yid ches nges rnyed shes rab mig thob shog// //

ちなみに、この木版本にも、同テキストの大谷写本同様に、帙番号が付されていない。このことは、この木版本は、シェーラブジンパの全集の一部としてではなく、単独のテキストとして印刷されたことを示唆している。

以上は、モンゴル国立図書館所蔵の木版本コレクションに見出されるシェーラブジンパの作品について現在判明している情報である。これとは別に、同図書館には膨大な量のウメ書体の写本が保存されており、その中にシェーラブジンパの作品が見出される可能性も大いにある。これについてはまだ目録が作成されていないので、委細は不明であり、今後の調査課題として残されている。

(3) 大谷写本の特徴について

以上、シェーラブジンパの作品の資料状況を確認したが、在印ゴマン学堂図書館から刊行された律の一作品を除けば、既に影印版の形で出版されている大谷大学図書館所蔵の一連のウメ書体の写本（以下、大谷写本）が現在一般に利用可能な資料の全体ということになる。そこで、次に、その資料的重要性を鑑みて、この大谷写本について、簡単な解説を加えておきたい。



大谷写本の八作品のうち、中観の五作品と論理学の一作品は、TOME 951に、般若の二作品は、TOME 953に纏められている。『大谷蔵外目録』によれば、この八作品は、全て、10 x 58.5 cm のサイズの紙葉に一フォリオあたり九行で記されている。その筆跡も、科学的な鑑定を行ったわけではないが、一見したところ非常に類似しており、同一人物により筆記されたものである可能性が高い。それ故、この一連の写本は同一の場所で同一人物により作成されたものと推定される。但し、前述したように、その第一フォリオに記された表題は筆跡や書式が異なるので、その部分だけは後代の付加であることは疑いない。

さらに、最初の中観の著作には、第一フォリオに記された表題の上部と各紙葉のフォリオ番号の脇に、Ca(㊟) という帙番号が付されていることが注目になる。一般にこの種の帙番号は、当該の作品が全集の一部であることを示すものであるが、シェーラブジンパの二つの般若学の作品の写本にも、Tha(㊟) という帙番号が付されているので、このことは、シェーラブジンパの全集が存在していたことを示唆するものである。但し、仮に全集が存在していたとしても、それは、版本として出版されたものではなく、写本の形であった可能

kun rdzob bden pa yin par tshad mas nges pa sngon du 'gro dgos par thal/
[以下に続く]



don dam bden pa tshad mas nges pa la kun rdzob bden pa tshad mas nges
pa sngon du 'gro dgos pa'i phyir/

難解な隠字体は、特に問答体の箇所に見出される。これは ... chos can/... thal/... phyir/ 等の定型、所謂、タクセル (rtags gsal) の形で記されており、類出するが、その箇所には上記の通り、一見しただけでは原型が想定できないような隠字体が多数使用されていることが分かる。それ故、端的には、文字から文章を読んでいくのではなく、内容から隠字体を解読しつつ読む必要があるので、当該テキストの内容について或る程度の知識がない者がこのテキストを読んでも、文字だけに基づいてはほぼ読解できないと言っても過言ではない。例えば、という文字は、という文字の隠字体であるが、これを文字だけから解読することは事実上不可能であり、文脈の理解が必須である。

(5) テキストの内容について

内容については、前六作品には、既に簡単な解題 (小川 1990) があるが、それは、この中観や論理学の学課に対する一般的な解説に過ぎず、テキストの内容を具体的に解説したものではない。それ故、その内容の分析については、今後の検討課題となっている。

六つの作品のうち、最初の五つは、『入中論』第六章の代表的な学課に対する⁵⁴註釈である。問題は、この五作品で第六章全体の註釈の完本となっているのか、あるいは、未完の作品であるのかという点であるが、まず、この五作品のうちの最後の作品である『中観我否定精解』の奥書には、「以上のように、吉祥なるチャンドラキールティにより著作された『入中論』のうち第六発心の精解を解説し終わった (de ltar dpal ldan Zla ba grags pas mdzad pa'i dBu ma la 'jug pa las sems bskyed drug pa'i 'tha' (read: mtha') dpyod bshad zin pa yin te/)」と明記され

54 ゲルク派の僧院で伝統的に用いられている『入中論』第六章の学課名については、西沢 2011、Vol. 1、p. 537f. 参照。

ているので、この作品が第六章の註釈の最後に当たることは疑いなかろう。

さらに問題は、第一の『二諦精解』がこの第六章の註釈の最初の作品に当たるのか否かという点である。『二諦精解』は、第六章の第23偈から第33偈までの註釈に当たるので、それ以前の第六章の偈文に対する註釈があっても不思議ではない。特に、二諦の学課の前には、第六章第八偈から派生した「否定対象の確認 (dgag bya ngos 'dzin)」や「帰謬の拒斥 (thal ldog)」という大きな学課があるので、これらに対する註釈があった可能性も否定できない。しかしながら、『二諦精解』のテキストは、「グル・マンジュゴーシャに帰命する (Na mo Guru-Manjughosāya)」という帰敬文から始まり、さらに三偈からなる帰敬偈が付されているが、これは、他の一連の作品には見出されない。他の作品では、冒頭部に偈文が一つ置かれているだけで、この帰敬文は見出されず、『水流精解』にいたっては偈文すら置かれていない。このことは、この『二諦精解』が『入中論』第六章に対する一連の註釈のうち最初の作品に当たることを示唆している。それ故、ここでは、暫定的に、この六つの作品は、『入中論』第六章に対する精解の完本と見なしておく。

但し、シェーラブジンパがこの第六章以外の章に対して註釈を著さなかったのか否か、さらには、精解の他に総義は著さなかったのか否かは不明である。一つの可能性としては、シェーラブジンパに『入中論』全章に対する註釈を著す計画があり、その作業過程で、特に重要な第六章の各学課ごとに上述の註釈を著したが、途中で頓挫したことが考えられる。もしそうであれば、各作品に、シェーラブジンパ自身による表題や著作の由来を記す奥書を欠いているのは納得が行く話である。無論、大谷大学図書館に所蔵されているものはあくまで部分的なものに過ぎず、さらに他の註釈もあった可能性も否定できない。以上の件は、シェーラブジンパの作品の調査を含め、今後の検討課題の一つとなつて

55 小川 1990、p. 2では、第23偈から第38偈 ab に対する註釈としているが、誤りである。

『二諦精解』の「原典の意味を確定するために科段と論証式を立てること (gzhung don nges pa'i phyir sa bcad dang sbyor ba bkod pa)」という科段において、シェーラブジンパは自身で『入中論』の偈文を引いて『二諦精解』の註釈範囲を示しているが、それは第23偈から第33偈に当たる。『二諦精解』2a2-4a3参照。委細は『二諦精解』の訳註研究において紹介する予定であるので、ここでは割愛する。

56 西沢 2011、Vol. 1、p. 537参照。

いる。

続く、他者排除論の著作は、現存が確認されているシェーラプジンパの唯一の論理学の作品である。木版本では、表題に「他者排除のテキスト (*gZhan sel gyi dpe tshig*)」としか記されていないが、大谷写本では、「他者排除精解 (*gZhan sel gyi mtha' dpyod*)」とあり、表題が一致しない。これは何れも、後代の人物が付けた仮の呼称であり、本作品には著者自身が付けた題目は存在していない。大谷写本の表題に、「精解」と記されているところから、この作品は、『量評釈』の一学課としての他者排除論に対する註釈のように見え、大谷写本の解題では、そのように解説されているが⁵⁷、実際にその内容を確認したところ、それは誤りであり、論理学の初等教科書であるドゥタ文献 (*bsdus grwa*) の一学課としての他者排除論のテキストであることが判明した。実際、上述の五つの中観のテキストは、註釈対象である『入中論』の当該の偈文を引いて解説しているのに対して、当テキストでは、『量評釈』の当該の偈文は引かれておらず、一貫してドゥタ文献に特徴的な用語を用いた問答体の議論が展開されている。

他方、第七と第八の般若学の著作は、残念ながら、大谷大学図書館から刊行された影印版には収められおらず、正書体にも直されていないので、委細は不明である。但し、表題から判断するに、第七の作品は、『現観莊嚴論』 (*Abhisamayālaṃkāra*) 第一章所収「仏言・論書 (*bka' bstan bcos*)」の学課までの註釈である。『現観莊嚴論』は全八章からなるが、そのうち第一章と第四章はチベットでは特に重要視されており、その註釈の分量も他の章に比べて著しく多い。第一章の伝統的な学課名については、既に別稿で紹介したので⁵⁸、委細はそれに譲るが、「仏言・論書」は、『現観莊嚴論』第一章第2-3偈から派生した主題であり、ゲルク派僧院の履修課程では、般若学の最初の学級で修学する主題の一つとなっている。それ故、この第七の作品は、『現観莊嚴論』第一章の最初の部分のみの註釈であり、第一章の残りの部分と第二章以降の註釈は、少なくとも大谷大学図書館には所蔵されていない。

他方、第八の作品は、『七十義の第二章・第三章・第四章・第五章』とあるが、表題から判断するに、これは、般若精解ではなく、その前に修学されるべき般

57 小川 1990、p. 5f. 参照。

58 西沢 2011、Vol. 1、pp. 529-531参照。

若学の初等教科書の一つである「七十義 (Don bdun cu)」の作品と推定される。それ故、第七の作品の続きの作品とは考え難い。七十義は、『現観莊嚴論』の主題である「八事七十義 (dngos po brgyad don bdun bcu)」の定義 (mtshan nyid)・分類 (dbye ba)・境域 (sa mtshams) などを簡潔に解説したものであり、八事を章立てして八章に分けられる。この第八の作品は、そのうち、第二章から第五章からなり、第一章及び第七章と第八章を欠いている模様である。その意味で、第七の作品も第八の作品も共に完全な作品ではない。その具体的な内容については、今後の検討課題として残しておく。

3. シェーラブジンパの著作を研究する意義

最後に、シェーラブジンパの著作を研究する意義について簡単に纏めておこう。これについては色々な観点から考えられるが、第一に、ジャムヤンシェーパの教学形成を解明する上での重要性が挙げられる。ジャムヤンシェーパの著作は三大寺の一つであるデブン寺のゴマン学堂において教科書として使用されており、ゲルク派の教学を形成する最も重要な柱の一つとなっている。ジャムヤンシェーパの教学自体、まだ研究の端緒に付いたばかりであり、端的には殆ど解明されていないが、彼の修学時代におけるシェーラブジンパの存在感を考えるならば、シェーラブジンパの影響力を無視することは出来ないであろう。伝記資料からは、ジャムヤンシェーパは論理学について特にシェーラブジンパから学んだとされるので、シェーラブジンパの著作と、ジャムヤンシェーパの論理学書を比較検討することを通じて、その影響力を文献の上から確認することが出来るかもしれない。さらには、伝記資料からは、ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパから中観を学んだという明確な記述は見出されないが、ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパの下で修学したのは、彼が中観学級に進級してからのことであり、しかも中観の学堂教科書を暗記するためニマタン学堂にペンツァムにも行っているので、その際、シェーラブジンパから中観について学んだ可能性も否定できない。それ故、両者の中観の著作を比較検討することも必要となってくる。

第二の意義としては、最後期のサンブ教学の一形態を示す資料としての重要性が挙げられる。サンブ教学は、ゴク翻訳師ロデンシェーラブ (rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab, 1059-1109) により十一世紀末から十二世紀初頭にかけてサンブ

寺を拠点としてその基礎が打ち立てられ、以後、チャパ・チューキセンゲ等の後継者達により継承・展開され、後代、チベットの諸宗派、中でも特にゲルク派とサキャ派の顕教教学を生み出す母胎となったものである。チベット仏教史におけるサンプ教学の位置付けとその重要性については、既に別稿にて解説したのでここでは再説しないが、⁵⁹チベット仏教教学の基層を形成する重要な役割を果たした。サンプ寺の伝統的な教学は、十四世紀頃からサンプ寺内にサキャ派及びゲルク派の講説院が創出され、両学派の影響力が高まるに従い、徐々に衰微し最終的には消滅するに至ったが、シェーラブジンパの著作は、サンプ教学の最後期の様態を反映する貴重な資料の一つである。後代のサンプ寺では、ゴク翻訳師やチャパに由来する伝統的なサンプ教学のほか、サキャ派やゲルク派の教学も入り乱れ坩堝のような状態になったが、そのことは、同じサンプ寺内のゲルク派系学堂の一つであるラトゥ学堂⁶⁰(Ra/Rwa stod grwa tshang)の学僧タチュンワ・ユンテンギャンツォ(Grwa chung ba Yon tan rgya mtsho, ca. 1400-1470)⁶¹の『量評釈精解』からも見て取れる。既に紹介したように、彼の著作には、ゲルク派の標準的な教学には見られないサンプ系の古い教学の残滓が確認されるのである。⁶²タチュンワは、十五世紀の人物であり、サンプ寺内のゲルク派系学堂において伝承された教学の最初期の様態を伝える者であるが、同様のことがより後代のシェーラブジンパ(ca. 1645-1715)の著作にも見出

59 サンプ寺及びその教学については、西沢 2011、Vol. 1、pp. 94-317において比較的细节に紹介したほか、その歴史的展開やその所属宗派については、西沢 2012、2013aにおいても簡単に論じたので、参照されたい。

60 ラトゥ学堂及びその教学については、西沢 2013bを参照。

61 タチュンワは、師にして初代ラトゥ学堂長を務めたマルカムバ・タクパサンボ(dMar/sMar/rMar khams pa Grags pa bzang po, alias, mKhyen rab dbang phyug Grags pa bzang po, ca. 1385-1465)と共にラトゥ学堂創設に大きく関与した人物である。彼の正確な年代は不明であるが、他の師に、タルマリンチェン(1364-1432)がおり、弟子にジャムヤン・チョクラウセル('Jam dbyangs mchog/phyogs lha 'od zer, 1429-1500)がいるので、大凡の年代として、その間をとって、1400-1470年頃の人物と考証しておく。タチュンワの事績と著作については、西沢 2011、Vol. 1、pp. 500-502に紹介したほか、西沢 2013b、pp. 127-130においても再説したので、参照されたい。

62 西沢 2011、Vol. 2、pp. 286-291参照。この件につきタチュンワの認識手段論を主題として考察した。

されるのか否か、あるいは、三大寺の学堂教科書に見られるような標準的なゲルク派の教学に完全に置き換わっているのか否かが検討課題となる。これを通じて、当時伝統的なサンプ教学の衰退の程度がどの程度のものであったのか推し量ることが期待される。

以上、シェーラブジンパの著作を研究するに際して特に重要と思われる二つの意義を挙げた。無論、それ以外にも色々な観点から彼の著作を研究することは可能であり、それは今後の検討課題として残されている。

結語

以上、ニマタンパ・シェーラブジンパの事績及び著作等について簡単に紹介した。現段階では、残念ながら、シェーラブジンパについて知られていることはかなり限定されており、委細は不明なままであるが、ジャムヤンシェーパとの交流など、これまで知られていなかったシェーラブジンパの一側面を紹介した。ここでシェーラブジンパの人物や事績に関する諸情報を整理しておくならば、以下の通りである。

1. シェーラブジンパは、『黄瑠璃史』所収のニマタン学堂長の系譜では、第28代学堂長ソクポ・シェーラブジンパ (Sog po Shes rab sbyin pa) としてその名を見出すことができる。ここから彼がソクポ、即ち、モンゴル人であることが判明する。
2. シェーラブジンパは、『大教義書』によれば、ジャムヤンシェーパ (1648-1721) が1668年にゴマン学堂に入寺した際の学堂長ルンブム・ロトゥギャンツォ (1635-1688) の三人の筆頭弟子の一人であり、ジャムヤンシェーパの兄弟子に当たる人物である。
3. シェーラブジンパは、当時、五大典籍の中でも特に論理学に通達した学者として知られており、ジャムヤンシェーパは、彼を「正理の主 (rigs pa'i dbang phyug)」と称し高く評価していた。
4. シェーラブジンパの正確な年代は不明だが、関連する前後の諸人物の年代から、1645-1715年頃の人物と推定される。
5. ジャムヤンシェーパがシェーラブジンパに出会ったのは、『クンケン自伝』によれば、1671年、彼が二十四歳の年である。(『クンケン伝』では、1672年。)

6. ジャムヤンシェーパはシェーラブジンパの下で論理学、律、阿毘達磨などを修学したが、特に、『量評釈』について昼夜を分たず深く学び、師事した年月は不定期で短かったものの、ジャムヤンシェーパ自ら「お互いに心が一つになった (phan tshun sems gcig byung)」と評するほど師弟関係は深いものがあつた。
7. ジャムヤンシェーパは、サンプ寺において1672年にカチュ・タコルを行い、その翌年の1673年に、師にして当時のゴマン学堂長であるロトゥギャンツォの指示に背いてまで、再度サンプ寺でラブジャム・タコルを行った。その背景には、サンプ寺の師であるシェーラブジンパの指示と学恩に報いる意味合いがあつた。

シェーラブジンパの著作については、五点の中観の著作と二点の般若の著作、律と論理学の作品が一点ずつで合計九作品の現存が確認された。そのうち、律と論理学の二作品は木版本がモンゴル国立図書館に所蔵されている他、八点の作品はウメ書体の写本として大谷大学図書館に保管されている。シェーラブジンパがモンゴル人であり、実際、彼の律と論理学の著作がモンゴルに残されていたことから、他にも彼の一連の著作がモンゴルに保存されている可能性がある。今後、その方面の調査が必要になることを最後に付言しておきたい。

文献表

略号

MHTL 『アク稀観書目録』を見よ。

Mvyut 『翻訳名義大集』を見よ。

Ota 『大谷大学図書館所蔵西藏文献目録』、大谷大学図書館、1973。

Toh 『西藏大蔵経総目録』、東北帝国大学、1934；『西藏撰述仏典目録』、東北大学、1953。

目録・辞典類

『大谷蔵外目録』

Catalogue of Tibetan Works Kept in Otani University Library. Otani University

Library, 1973.

『雪域歴代名人辞典』

Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod. Comp. Ku zhul grags pa 'byung gnas/ rGyal ba blo bzang mkhas grub, mTsho sngon mi rigs par khang, 1992.

『藏漢大辞典』

Bod rgya tshig mdzod chen mo. 2 vols., Mi rigs dpe skrun khang, 1993.

『トゥンカル大辞典』

Dung dkar tshig mdzod chen mo. Ed. Dung dkar blo bzang 'phrin las. Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2002.

『翻訳名義大集』(Abbr. Mvyut)

榊亮三郎編著、『梵藏漢和四譯對校・翻訳名義大集』、二巻、再版、国書刊行会、1965。

チベット語文献

『アク稀観書目録』

dPe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig don gnyer yid kyi kunda bzhad pa'i zla 'od 'bum gyi snye ma bzhugs so. In: *Materials for a History of Tibetan Literature. Part 3.* Ed. Lokesh Chandra. New Delhi, 1963, pp. 503-601. [Abbr. MHTL]

『黄瑠璃史』

sDe srid sangs rgyas rgya mtsho, *dGa' ldan chos 'byung vaidūrya ser po.* Ed. rDo rje rgyal po, Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang, 1989.

『クンケン自伝』

'Jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje ngag dbang brtsun 'grus, *rJe btsun 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rje'i rnam thar bka' rtsom tshigs bcad ma bzhugs so.* In: *Kun mkhyen 'jam dbyanags bzhad pa'i rdo rje'i gsung 'bum.* Vol. ka, pp. 5-18 (1-7b2). [タシキル版 (bKra shis 'khyil dpar ma)]

『クンケン伝』

dKon mchog 'jigs med dbang po, *Kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa'i rnam thar.* Kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1987.

『ゴマン学堂史』

'Bras spungs mkhan khri bsTan pa bstan 'dzin, *Chos sde chen po dpal ldan 'Bras spungs bkra shis sgo mang grwa tshang gi chos 'byung chos drung g-yas su 'khyil ba'i sgra dbyangs zhes bya ba bzhugs so.* 2 vols., Mundgod: Drepung Gomang Library, 2003.

『サキヤ善説』

Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan, *Sa skya legs bshad*: Helmut Eimer, *Sa skya legs bshad: Die Strophen zur Lebensklugheit von Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan (1182-1251)*, Wien, 2014.

『大教義書』

Kun mkhyen 'Jam dbyangs bzhad pa, *Grub pa'i mtha'i rnam par bzhag pa 'khrul spong gdong lnga'i sgra dbyangs kun mkhyen lam bzang gsal ba'i rin chen sgron me zhes bya ba bzhugs so.* Mundgod: Drepung Gomang Library, 1999.

『ツォンカパ伝』

Cha har dge bshes Blo bzang tshul khrims, *rJe thams cad mkhyen pa tsong kha pa chen po'i rnam thar go sla bar brjod pa bde legs kun gyi 'byung gnas zhes bya ba: The Collected Works (gsung 'bum) of Cha har dge bshes Blo bzang tshul khrims.* Ed. Chatring Jansar Tenzin, Vol. 2, New Delhi, 1971.

『ツォンカパ大伝』

mKhas grub dge legs dpal bzang, *rJe btsun bla ma Tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs zhes bya ba bzhugs so.* [シヨル版 (Zhol dpar ma)]

『二諦精解』

Nyi ma thang pa Shes rab sbyin pa, *Nyi ma thang dpon slob Shes rab sbyin pas mdzad pa'i bDen gnyis kyi mtha' dpyod bzhugs so.* In: サンブ僧院ニマタン学堂長シェラプジンパ著『中観学説決択集 原本複製 付解題』（大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書3）臨川書店、1990、pp.PL. 1-15。

『マントウ仏教史年表』

Mang thos klu sgrub rgya mtsho, *bsTan rtsis gsal ba'i nyid byed lhag bsam rab dkar zhes bya ba.* In: *Sa skya'i chos 'byung gces bsdu.* Vol. 5, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang, 2009, pp. 169-402.

参考文献

石濱裕美子／福田洋一

2008 『聖ツォンカバ伝』、大東出版社。

小川一乗

1990 「サンブ僧院ニマタン学堂長シェラブジンパ著『中観決択集』について」 [=サンブ僧院ニマタン学堂長シェラブジンパ著『中観学説決択集 原本複製 付解題』(大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書3) 臨川書店、1990所収の解題]

小野田俊蔵

1989 「チベットの学問寺」『チベット仏教』(岩波講座・東洋思想 第11巻)、岩波書店、pp. 351-373。

西沢史仁

2011 西沢史仁、『チベット仏教論理学の形成と展開—認識手段論の歴史の変遷を中心として—』、全四巻、東京大学、2011。(国立国会図書館 請求記号：UT51-2012-M586；東京大学文学部図書館 請求記号：2011：Ⅲ：7：4)。

2012 「サンブ教学の歴史的展開に関する一考察」『日本西藏学会々報』58、pp. 1-14。

2013a 「サンブ寺の帰属問題—サンブ寺はカダム派所属の寺院であるのか—」『真宗総合研究所研究紀要』30、pp. 33-52。

2013b 「ゲルク派論理学の歴史的展開の一局面—ラトゥ学堂の成立史とその教学を中心として—」『インド論理学研究』6、pp. 95-168。

Onoda, Shunzo

1990 “Abbatial Succession of the Colleges of Gsang phu sne'u thog Monastery.” *Bulletin of the National Museum of Ethnology, Osaka* 15-4. pp. 1049-1071.

* 本稿は、JSPS 科研費 JP15K02046の助成に基づく。